



『日本・ポーランド関係史Ⅱ：1945～2019』

エヴァ・パワシュルトコフスカ（著）白石和子（訳）彩流社 2021.12

本書の前編にあたる『日本・ポーランド関係史 1904～1945』（エヴァ・パワシュルトコフスカ；アンジェイ・タデウシュ・ロメル著、柴理子訳、彩流社、増補改訂版 2019、初版 2009）では、123年ぶりに復興した民族国家の世界からの承認を求めるポーランドと、新興大国としてヨーロッパで確立した地位を築きたい日本が関係を深めていく過程が分析され、政治関係を中心にとりわけ軍事・諜報分野できわめて緊密な関係が形成され、第二次大戦中も維持されていたことが明らかにされた。

前著は、両国のオリジナル資料によって多くの事実が明確にされるとともに、それまで歴史のはざまの個人的エピソードとして知られていたことが、改めて両国の国家間関係の中で歴史的に位置づけられたとして高く評価された。

その続編として書かれた本書は、第二次大戦終結後から現在までの両国関係を分析し、大きく4つの部分からなる。第一部は本書の大部分をなす年代別の政治と外交、第二部は両国の相手国文化と言語の研究、第三部は両国におけるそれぞれの文化普及・交流史、第四部はそれぞれに在住する個人と組織を取り上げている。限られた紙幅の中で、丹念な資料調査と多くのヒアリングを基礎とした600頁を超えるこの大著を詳しく紹介することはどうも無理なので、評者が本書を読んで感じたことを中心に書いてみたい。

政治・外交面での両国関係

第一部の時代背景は、主にポーランドの側の激変した政治状況、すなわちソ連の圧力下の社会主義圏への組み入れ、国内の変革運動と戒厳令、社会主義からの体制転換であり、日本の側のアメリカの影響下に限られた防衛力のみをもつ平和国家への国家進路の変更であった。結果的に冷戦体制下で東西両陣営にそれぞれ所属することになった日本・ポーランド両国は、政治的・軍事的に特段に関係を深めることはなく、特に日本政府の、懸案事項も利害関係も少ないポーランドとは政治的に距離を置いた外交姿勢が印象に残った。

唯一といえる例外は、おそらく、国内的には東南アジア・インド重視の外交政策と受け取られている2006年の麻生外相による「自由と繁栄の弧」外交の提言が、冷戦後にユーラシア大陸周辺部に成長する民主主義国家としてのポーランドをバルト海に至る「弧」の最後のパーツとして重視していたという指摘である。この外交戦略を地政学的な発想として見直すのは興味深いものがある。

前著の中で日本・ポーランド関係を律していた最大の要素は、共通の隣国、ロシアとの関係であ

った。その両国の地政学上の共通項は戦後の歴史の中でいつしか忘れられてきたが、2022年2月24日のロシアによるウクライナ侵攻によって再び激しく思い起こされることになった。日本とポーランドの政治的・外交的関係は、今後大きく変わる可能性もあることを、図らずも旧著とともに本書が示していると感じた。



学術・文化面での両国関係

第二～四部は、外交史を超えた、本書の大きな特色を示す部分で、広く学術・文化面に目が配られ、私人や民間の組織の活動までが紹介されている。本書の中にきわめて多くの知己の名前を発見して驚くのは評者ばかりではあるまい。それは単に懐かしい個人的な感慨を呼び起こす以上に、個人と個人のつながりが両国の相互理解と相互関係の基礎であることを改めて思い返させた。どの国との関係でも同じであろうが、とりわけ日本とポーランドとの関係では、個人的なつながりの感覚がより大きな両国間の関係に結実するケースが多いように感じられた。

昨今ますます多くの日本人がポーランドに関心を持ち、同国を訪れているとの実感を持っていたが、本書が個人や民間組織の活動に光を当て、また第一部でも政府レベルでの政治外交だけでなく、大使館レベルでの個人と組織の活動が資料によって丁寧に分析されたおかげで、そうした変化の背景を確認することができた。

個人的には評者の当時の所属を関西学院大学と訂正したいが、同大学が思った以上にポーランドと縁が深い事実を本書によって知ることができた。

事実を丹念に調査し、幅広い関係者にも直接ヒアリングを行った著者の努力にはただ感嘆するほかない。本書の成果を高く評価するとともに、その成果が、本書での研究対象外とされている両国の経済関係についてのしかるべき専門家による将来の詳細な分析にもつながることを期待したい。

（藤井和夫、日本ポーランド協会関西センター代表）